

ファミリー登山の是非

ファミリー登山というか、子連れ登山が増えている。昨夏は北穂高岳でそれを感じたが、今夏は富士山で子連れ登山の多さに驚かされた。小学校低学年ならまだしも、未就学児も少なくない。すれ違う子に「いくつ？」と尋ねると、「4歳」なんて返事があったびっくりする。背負子に赤ん坊を入れて登ってくる人もいる。

ファミリー登山の是非については、これまでも論じてきた。是もあれば、非もある。リーダーであるパパさんが、山が分かっているならば是、分かっているなければ非である。9月10日付け朝刊紙のそのページは紅葉特集だった。記事の中に、「背負子に愛児 登山一家の幸せ」という見出しが躍っていて、「四十数年前、1歳2カ月だった長男を背負い、夫婦で見た加賀白山の紅葉が忘れられません」と書き出されたファミリー登山の紹介があった。

このご夫婦は中学の同級生で、奥多摩や丹沢がデート場所だったくらいの山好き。前述のご長男を含めて2男1女、全員で登山を楽しみ、お子さん達が長じて結婚、誕生した総勢11人のお孫さんたちも次々山デビューさせている。幸せそうなファミリー登山の記事に触発されて、我が家でも子連れ登山をはじめると思われた方も少なくないだろう。

ぼくが懸念するのは、まさにその点なのだ。ファミリー登山も登山なのである。記事に登場するご夫婦は、山が分かっているらしい。ご主人は、「自分の趣味に付き合ってくれる家族には、『ギリギリ』は一切させない、と決めたんです」と発言している。ファミリー登山が自分の趣味という認識があり、ギリギリが見えている。山が分かっている証拠だ。このファミリーにぼくが余計な口出しをすることはしない。

懸念するのは山が分かっているパパさんが、この楽しい記事に触発されて妻子を伴ってのファミリー登山を思い立ってしまうことだ。ディズニーランドでころんで足首骨折すれば、すぐに救急車が救助に来てくれる。しかし、高尾山で骨折しても救急車はきてくれない。山が分かっている人には、そんな当たり前のことが認識されていないのだ。緊急事態が発生したとき、救急車が来ることのできない場所と知っていたら、幼児を同伴するなんて考えもしないだろう。日本の山はそこが日本一の富士山でも、空気が薄いことは別にして、天気が良く風がなかったら困難や危険を伴うことはない。しかし、天気が急変したらどうする。かなり厳しい状況に追い込まれることは、論を待たない。

ファミリー登山に限らず、山は素晴らしい世界である。しかし、山は非日常の世界。魅力もいっぱいだが、危険もいっぱい。山の魅力を語って、まだ山と出会っていない人を山に引きずり込もうと思ったら、同時に山の危険も語っておかなければいけない。楽しいファミリー登山の記事を目にして、そんなことを考えた。